

中国皮影における雷公像の図像的考察

羅 玲

序

中国の皮影とは、北宋時代頃から民間芸能の一つとして流行した皮影戯に使用する道具（影偶）である。牛や驢馬などの皮を加工して平面に展ばし、切り抜いて賦彩して人物、神怪、地獄など様々な造形をつくり、それらを後方から光を当ててスクリーンに影を映し、『封神演義』『十三福』『遊地獄』⁽¹⁾など様々な物語を上演する。現存作例は、明時代のものが僅かに残り、そのほかは清時代から現代のものが殆どを占め、成都・中国皮影博物館に二〇万件余、中国美术学院皮影芸術博物館に四万件余、さらに各地の民間保護センター、民間の蒐集家によって収蔵されている。日本では国立民族学博物館や早稲田大学演劇博物館などが所蔵している。それらの作例は、精細な彫技によって制作され、高い芸術性を持つものが少なくない。

これまでの皮影研究は、皮影戯の起源と歴史的展開を考察した通

史的研究、一地区の皮影を対象とした地域的研究、影戯の劇本や唱腔（節回し）などに関する研究に大別できるが、皮影の造形に関する研究については作例の紹介や分類にとどまることが多く、図像の意味やその成立過程を詳細に検討した美術史研究が殆どみられないのが現状である。その要因として、作例数や図像の種類が豊富である一方で、制作年代が判明する基準作例は皆無であり、民間芸能という性格のために確かな史料が極めて少ない。また、皮影は頭部と体部を分離してつくる特徴があり（図1）、とくに人物像は頭部と共用している場合が多く、影戯を離れて収蔵されてしまうと単独ではそれが誰なのか判断し難いこともあげられる。それに対して、本論で取り上げる皮影の雷公像は、図像的特徴から一見して雷公と識別できるといふ利点があり、その図像の成立と展開を考察することは、今後のそのほかの図像研究の一助となることが期待される。

現存作例の雷公像の特徴は、周囲に連太鼓、手には雷を落とすための槌と楔を執り、頭部は尖った喙をもつ鳥首、背中に両翅、手足

に鋭い爪をもつ姿である。こうした雷公像は従来の研究で知られる漢・唐時代の人物形や鬼神形の雷神像とは異なるもので、昨年二〇一五年、江玉祥氏は皮影の雷公像は清朝以後に成立したという論考を発表した⁽³⁾。しかし、管見によればそれは北宋時代に遡ると考えられる。

そこで以下では、まず皮影の雷公像の造形特徴を確認し、次に雷公像に関する従来説を整理したうえで、これまで注目されていない考古資料や道教経典の記述に注目しながら、皮影の雷公像の図像の成立について考察してみたい。

一 皮影の雷公像の作例及び特徴

皮影の雷公像は、連鼓や楔などの持物、風神像や電母像など天候神との組み合わせから雷公像と判断できる作例が十六件確認でき、また雷公像と図像的に類似する雷震子像及び頭部または体部のみ現存する作例が百余件確認できる。雷公像は制作地域にみると陝西省六件、甘肅省六件、河北省一件、北京市二件、不明一件である⁽⁴⁾。

まず、天候神と共にあらわされた作例は三件あり、そのうち成都・中国皮影博物館所蔵の陝西省の作例(図2)をみると、左側から花形の扇子を持ち虎に乗る風婆、稲妻を起こす鏡を両手に持つ電母、頭上に火炎文で繋がった五連鼓があり手に楔と槌を執る雷公像、払子らしきものと茶杯を手に持ち五頭の獅子に乗る雨師、最後に頭

上にシヨール状のものをたなびかせる妖風怪とされる図像があらわされている⁽⁵⁾。これら五尊の中央に位置する雷公像を詳しく見ると、尖った鳥の喙を持ち額に第三の目がある。頭上には小冠を頂き赤い毛のような角状のものが二本生えている。首に領巾をつけ、袖無しの胴衣の腹部に円文をあらわし、短褲を穿き、腰に獣皮をつけ、足には四本の鋭い爪がある。体の周りには飄帯がたなびく。

次に、単独の作例は十四件ある。まず陝西省の閩中民俗芸術博物院所蔵の作例(図3)を見ると、周囲に火炎文で繋がった五連鼓があり、先の作例もそうであったが、これは太鼓から生じた雷音をあらわしていると考えられる。頭部は尖った鳥の喙に三目であり、黒い毛の角状のものが二本生えている。大きく挙げた手に楔と槌を執り、首に領巾をつけ、袖無しの胴衣の腹部に円文をあらわし、短褲を穿き、腰に獣皮をつけ、足は四本の爪がある。体の周りに飄帯がたなびく。なお、本作例は腕から背中にかけて大きな翅を広げている。

続いて、もう一つの単独の作例として北京門頭溝区博物館所蔵の作例(図4)を見ると、雲に乗った上半身が裸形の雷公像には頭上に火炎文で繋がれた五連鼓が一の字形であらわられている。頭部は尖った喙があり、小冠を頂き、手に楔と槌を執り、首に領巾をつけ、腰に獣皮をつけ、よくみると先の二例と同様に足には四本の爪がある。また、広げた両腕の下には翅があらわされている。

さらに、連鼓を伴わない作例が二件あり、中国美術館所蔵の河北省の現代作家が制作した作例を見ると(図5)、これまでと同様に



図4 雷公像 清～現代 北京 北京門頭溝区博物館



図1 皮影頭部 皮影体部 清～現代 陝西省 成都・中国皮影博物館



図5 雷公像 現代 河北省 中国美術館



図2 風電雷雨 清～現代 陝西省 成都・中国皮影博物館



図6 雷震子像 清～現代 甘肅省

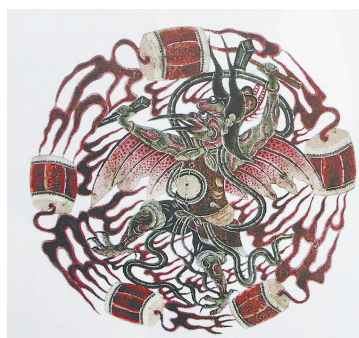


図3 雷公像 清～現代 陝西省 関中民俗芸術博物院

尖った喙があり、冠を頂き、手に楔と槌を持ち、腰に獣皮をつけ、短褲を穿き、背中に翅があらわされている。なお、足に靴を履くのは他作例と異なっている。

ところで、雷公像に類似する図像として雷震子像がある。雷震子とは『封神演義』の登場人物で、周文王が雷の鳴る燕山で見つけて養子とした第百子である。後に文王が紂王に追われた際、臨潼関で追手を撃退して文王を助けた。その様子を題材とした皮影が甘肅省の作例に見える(図6)。臨潼関が左下にあり、雲上に周文王と雷震子があらわされている。雷震子の図像を見ると、頭部は尖った喙額に第三の目、小冠を頂き、毛状の角がある。首に領巾、腰に獣皮をつけ、短褲を穿き、足は四本の爪で、背中に大きな翅が生えている。なお、手には棒状の武器を持ち、楔や槌を持たないのが雷公像と異なる点である。

以上のように皮影の雷公像は、制作地は様々で、色使いにも相違があるが、共通性の高い特徴を整理すると、以下のようなふうになる。まず雷音の表現と思われる火炎文で繋がった五連鼓をあらわす作例が多い。次に頭部は尖った喙、第三の目、毛状の角があり、小冠を頂くことがあげられる。手には必ず楔と槌を持ち、足は四本の爪が多い。首には領巾、腰に獣皮をつける。また、背中や腕から翅が生える作例が多く、その翅は羽状のものと骨格のある皮膜状のものとの二種類がある。こうした特徴のうち連鼓をあらわし、楔や槌を持つ表現は、後述する前漢時代の雷公像にみられる特徴だが、尖った喙

や額の第三の目など古い時代の雷公像には無い特徴が見受けられる。そこで以下では、雷公像はどのような姿形とされてきたかについて歴史的展開を追うことから始めたい。

二 文献史料にみえる雷公像の変遷

雷公像については幾つかの先行研究があり、それらに依りつつ文献の記述と図像の変遷を確認しておこう。⁶⁾

まず、神格として雷神が登場する最も古い史料は戦国から秦漢時代に成立した『山海経』である。同書の第十三海内東経には「雷澤中有雷神、龍身而人頭、鼓其腹、在吳西。」⁷⁾とあり、雷神は龍身人頭で腹を鼓にするという。次に前漢時代『淮南子』原道訓に「是故大丈夫恬然無思、詹然無慮。(中略)、令雨師灑道、使風伯掃塵、電以為鞭策、雷以為車輪。」⁸⁾とあり、雷は君子の雷車の車輪になるという。また、『楚辞』卷五遠遊に「左雨師使徑待兮、右雷公以為衛。」⁹⁾とあり、屈原が天上世界に遊ぶ際、左側は雨師を従わせ、右側は雷公が護衛するという。なお、これが「雷公」の初出であり、右の『山海経』や後述の諸資料をみると「雷神」と同じことを言っている。それ故に本論では以下「雷公」として論を進めていく。

次に、従来の研究でよく指摘される後漢時代の王充撰『論衡』雷虚篇には、¹⁰⁾当時の人々が抱いていた雷公像の姿として次のように記されている。

凶画之工、凶雷之状、累累如連鼓之形。又凶一人若力士之容、謂之雷公。使之左手引連鼓、右手推椎、若擊之状。其意以為…雷声隆隆者、連鼓相扣擊之音也。其魄然若蔽裂者、椎所擊之声也。其殺人也、引連鼓相椎并擊之矣。

(画工は雷の像を画く際、幾つもの太鼓が連なる形に描く。また一人の力士のような姿を画いて、これを雷公という。左手で連なる太鼓を引き寄せ、右手で楔を推し、太鼓を叩いているようにする。凶の意味は、雷鳴のごろごろするのは連鼓を打ち合う音であり、ピリピリものを破り裂くようなのは、楔を叩きつける音である。人を殺す時は、連鼓を引き楔を推して同時にその人を撃つのである。)

王充はこうした雷公像の存在は虚妄だと同書で批判しているが、このことは後漢時代には右のような雷公像のイメージが広まっていたことを物語っている。それは力士の姿で連鼓や楔を手を持つ姿であり、後世の雷公像の祖形がある程度出来上がっていたことが分かる。

続いて、東晋時代の干宝撰『搜神記』卷十二には「扶風楊道和、夏於田中、值雨。至桑樹下、霹靂下擊之。道和以鋤格折其股、遂落地、不得去。昏如丹、目如鏡、毛角長三寸、餘狀似六畜、頭似獼猴。」¹¹とあり、地に落ちた雷は昏は丹色、目は鏡のようで、毛角の長さは三寸あり、猴のような頭で、それ以外は家畜のようだったと記されている。ここでは頭が猴に似ていることと、毛の角があることに注意しておきたい。

中国皮影における雷公像の図像的考察

唐時代になると雷公像に関する記述はさらに具体的になる。段成式撰『酉陽雜俎』前集卷八雷には「貞元年中、宣州忽大雷雨、一物墜地。猪首、手足各兩指、執一赤蛇嚙之。俄頃、雲暗而失、時皆凶而伝之。」¹²とあり、貞元年間(七八五〜八〇五)に宣州で突然激しい雷雨があり、あるものが落ちてきた。豚の頭、手足は二本指で一匹の赤蛇を掴み噛んでおり、人々はこれを絵に描いて伝えたという。この豚の頭、二本指の手足は以前には見られなかった特徴である。

こうした地に堕ちた雷公と思しき怪物は従来指摘されるように諸書に見える。唐代の裴鏘撰『傳奇』(『太平広記』卷三九四所収)には、元和年間(八〇六〜八二〇)に広東省の陳鸞鳳という者が村人の雨乞いが叶えられなかった腹いせに雷神廟を焼き、禁忌の黄魚と豚肉を食べて雷鳴の下で刀を振り回したところ、雷の左股を切り落とす、雷が地に堕ちた。堕ちた雷について「状類熊猪、毛角、肉翼青色、手執短柄剛石斧。」¹³とあり、それは熊や豚の類であり、毛角、青色の肉翼、手に柄の短い石斧を執っていたという。豚の頭や毛角は先の史料にみえたものだが、肉翼や手に石斧を執ることは新しい要素である。

続いて、五代の杜光庭撰『録異記』(『太平広記』卷三九三所収)には次のように記されている。¹⁴

唐潤州延陵界茅山界、元和春、大風雨。墮一鬼、身二丈余、黑色、面如猪首、角五六尺、肉翅丈余、豹尾。又有半服絳褌、豹皮纏腰、手足兩爪皆金色。執赤蛇、足踏之、瞪目欲食、其声如

雷。

（唐時代の元和年（八〇六―八二〇）の春、潤州延陵県の茅山で、大風雨が有一匹の鬼が墮ちてきた。身長は二丈余、黒色、顔は豚の頭のように、五六尺の角が生えている。肉の翅が一丈余、豹の尾、また半服の赤い褲を穿き、豹の皮を腰に纏っている。手足は金色の二本の爪、赤い蛇を執り、足で踏みつけ、目を見開き、食べようとしていた。その声は雷のようだった。）

この地に墮ちた鬼は、これまでの史料の記述と雷のような声を出すことから、雷公の一種と考えられる。豚の頭、角、肉の翅などは従来通りだが、赤い褲を穿いて豹の皮を腰に纏うことは新しい特徴であり、前章で見た皮影の雷公像の特徴と一致する点が大変興味深い。

皮影の雷公像のもう一つの特徴である尖った喙は、明時代の諸史料にみえる。万暦年間（一五七三―一六二〇）頃の余象斗撰『北方真武祖師玄天上帝出身志伝』別名『北游记』三卷「祖師収五雷五音」には「天君於廟門大喝一声、手執令牌一照、五雷神踞于天君面前。

天君用手向南方一指、出五个雷公、尖嘴鷄翅、手執尖槌近前。那五神变出真形却是五个鼓。五雷神押住。天君曰此五雷我亦留、随我去降妖。」¹⁵とあり、真武祖師を救うために現れた雷主の天君が五人の雷神を降伏させた時、尖った嘴に鷄翅で手に槌を執った手下の五人の雷公を呼び寄せると、五人の雷神が恐れて元の姿である鼓に変身した。天君は、この五雷は私が留め、これから私に随って妖怪退治に行くと言ったことが記されている。ここでは尖った嘴のみなら

ず、五人の雷神の元の姿が鼓であり、それを雷主の天君が留めるという記述は、皮影の雷公像にあらわされた五連鼓とも何らかの関係があるのかも知れない。

このほか明時代の謝肇淛撰『五雜俎』天部にも「鷄形肉翅」、また徐応秋撰『玉芝堂談薈』雷神形状には「鷹嘴龍爪、而膊下有肉翅如蝙蝠状」と記されている¹⁶。既に指摘されているように肉翅とは蝙蝠のような骨格のある皮膜状の翅のことであり、これも皮影の雷公像の翅の表現に一致していると言えよう。

皮影の雷公像にみられた三目の特徴は清時代の黄伯禄（一八三〇―一九〇九）編『集説詮真』にみえる。同書の巻四には「今俗塑雷神像、若力士裸胸袒腹。背挿兩翅。額具三目。臉赤如猴、而下顎長而銳。足如鷹鷂。而爪更厲、左手執楔、右手持槌。作欲擊状。自頂至傍。懸連鼓五个。左足盤躡一鼓、称曰雷公江天君。」¹⁸とあり、上半身裸形の力士像で背中に翅があるという記述に続いて「額具三目」とあることが従来指摘されている。その他の特徴として下顎が鋭く、足は鷹のように爪が鋭く、左手に楔、右手に槌を持ち、五連鼓を懸けることが記されている。後述するように江玉祥氏はこうした記述を参考にして皮影の雷公像の成立を清時代に求めている。

このように従来の研究によって雷公像に関する文献の記述を整理すると、最も古い史料は秦漢時代の『山海経』に「雷神」とあり、「雷公」の初出は前漢時代の『楚辞』である。後漢時代の『論衡』には力士の姿で連鼓や楔を手を持つ雷公像の祖形が登場し、東晋時代の

『搜神記』には猴の頭部、毛角、家畜の体と言った動物的なイメージが現れる。唐時代の『酉陽雜俎』『伝奇』では熊や豚、二本指の手足などと具体的に記され、さらに肉翼、手に石斧を執ることが記される。続く五代の『録異記』では赤い褲を穿いて豹の皮を腰に纏う服制に関する記述があらわれる。そして明時代『北遊記』『五雜俎』には、尖った嘴、蝙蝠のような骨格のある翅、龍の爪について記されている。さらに清時代になると額の三目の特徴について記されていることが分かる。そこで、こうした文献の記述を踏まえつつ、次章では従来知られている雷公像の図像的変遷を確認したいと思う。

三 雷公像の図像的変遷

雷公像をあらわした最も古い作例は一九七三年に湖南省長沙市馬王堆三号墓から出土した前漢時代の太一将行図(図7)帛画と考えられる。この帛画の図像解釈については諸説あるが、近年、黄盛璋氏は墓主の生前の戦勝祈念のための図であると解釈している。⁽¹⁹⁾帛画上端の左に雷の古字が書かれており、周世榮氏は帛画の左上に雷公像の残欠がある



図7 太一将行図部分 前漢
馬王堆三号墓帛画



図8 雷公像 後漢 山東省臨沂市吳
白庄出土画像石 臨沂市博物館



図9 雷公像 後漢
江蘇省銅山県画像石

といい、顔は猴のようで、幘頭を被り、目を見張り、口は鳥の喙、短袴を穿き、上方に雷とみられる線状を描いているという。⁽²¹⁾図版では細部を確認することはできないが、前漢時代に遡る雷公像の最初の作例として重要である。

後漢時代の作例では、連鼓が周囲にあらわされた雷公像が登場する。従来あまり注目されていないが、臨沂市博物館所蔵の山東省臨沂市吳白庄出土画像石(図8)には、頭部は熊のような動物形で、手に撥を持ち、腕と大腿部から翅を生やし、臀部から尾が生えた雷公像があらわされ、その周囲には三条の線で繋がった十個の鼓が廻っている。こうした連鼓を周囲に廻らす雷公像があらわされる形式は、後の南北時代や延いては皮影の雷公像にもみられる特徴である。このほか江蘇省銅山県画像石(図9)には太い綱で繋がった五連鼓を曳く力士像があらわされている。先にみた『論衡』にある雷



図10 雷公像 後漢
山東省武氏祠画像石

公像を描く際の「図雷之像、累累如連鼓之形。又図一人若力士之容、謂之雷公、使之左手引連鼓」という記述と一致しており、また第一章でみた皮影の連鼓（図4）の形に類似している点は大変興味深い。このほか

雷車に乗る雷公像や手に槌と楔を執る雷公像（図10）が山東省の画像石にあることが知られている。

次に南北朝時代の作例として、敦煌莫高窟第二四九窟と二八五窟の天井壁画に描かれた雷公像があげられる。いずれも十個または十個の連鼓を周囲に廻らす鬼神形の雷公像が配され、第二四九窟では左下に両手で楔を執る雷公像があらわされている⁽²²⁾。ここで注目されるのは楔を執る雷公像の頭部は豚状で、さらにいずれの雷公像も手足すべて二本の爪に描かれている点である。これは唐代の『西陽雜俎』に「猪首、手足各二指」と一致しており、こうした南北朝時代の雷公像が後世の説話に記された雷公像の源流であった可能性が考えられよう。さらに、北齊時代の婁叡墓壁画にも連鼓を周囲に廻らす雷公像が描かれており、両手足に槌を持っているが、やはり爪は二本指である、また翅や尾が生えている点は後漢時代の臨沂市の画像石と類似しており、図像がある程度継承されていた可能性が考



図11 雷公像 唐 仏伝図部分
大英博物館

えられる⁽²³⁾。五代の『録異記』に記された「豹尾」もその延長線上にあるのかも知れない。

唐時代の作例は仏伝図中と千手観音像の眷属などにみえる。大英博物館所蔵の幡画仏伝図中の雷公像（図

11）は、十二個の連鼓を周囲に廻らし手に楔と槌を持ち、上半身裸形で下半身に斑点があらわされた黄褐色の短褲を穿いている。こうした姿は先にみた五代の『録異記』に記された「半服絳裊、豹皮纏腰」を連想させる。またギメ東洋美術館所蔵の絹本降魔成道図にも連鼓を周囲に廻らした雷公像があらわされている。さらに、四川省蒲江県白岩寺前十号龕に、千手観音像の眷属として本尊の向かって右上に連鼓を周囲に廻らし手に棒状のものを持つ雷公像があらわされている⁽²⁴⁾。先に見た文献史料の『論衡』には「図雷之像、累累如連鼓之形。」とあったが、雷公像の周囲に連鼓を廻らす記述はみえない。しかし、後漢〜南北朝時代の作例を踏まえると、唐時代には連鼓を周囲に廻らす雷公像がある程度定形化して流布していたことが考えられる。

続いて、五代から南宋にかけて豚のような頭部の雷公像が現れる。江蘇省棲霞寺舍利塔基壇仏伝図中の降魔成道の場面に、周囲に連鼓



図12 雷公像 五代
棲霞寺舍利塔仏伝図部分

を廻らし槌状の持物を執る雷公像（図12）があらわされているが、鼻が長い豚のような顔をしている。また重慶市大足宝頂山石刻大仏湾

第一六号には上半身に七個の連鼓を廻らし、手に槌と楔を持つ雷公像がみられるが、これも鼻が長い豚のような頭部となっている。豚

状の頭部は先にみた唐代の『西陽雜俎』『伝奇』また五代の『録異記』に記されており、当時の雷公像の姿を反映したものと考えられよう。

さらに、南宋～元時代とされる個人蔵人物螺鈿聯（図13）に注目したい。杉原たく哉氏が指摘した



図13 人物螺鈿聯 南宋～元
個人蔵

雷公像は、鳥の嘴、両手で楔を握り、皮膜状の肉翅が生えた姿であらわされている。²⁵ また杉原氏は指摘していないが、よくみると額に第三の目があらわされていることが分かる。鳥の嘴、肉翅、三目は第一章でみた皮影の雷公像の特徴であり、皮影の雷公像の成立は少なくとも南宋～元時代まで遡る可能性が考えられる。

後述する明時代の刻本の挿絵や絵画作例などにあらわされた雷公

像も鳥の嘴や肉翅などの特徴があり、それは皮影の雷公像の特徴と一致している。そこで次章では皮影の雷公像の成立について考察してみたい。

四 中国皮影の雷公像の成立

皮影の雷公像については、昨年二〇一五年に、江玉祥氏が「中国皮影戲影偶中的雷公形象」²⁶を發表してその成立について論じている。江氏は①文献史料中の雷公の記述、②明時代『封神演義』に記された雷祖聞太師の三目や雷震子が翅を生やす特徴、③清時代以降の民間廟宇にみる塑像の雷神像が先にみた清時代の『集説詮真』の記述と近似すること、④李光庭『郷言解頤』の「雷」に記された戯曲に登場する雷公役の姿が、力士像で左手に連鼓を引き右手に槌を執る『論衡』以来の古い雷公像と同じであること、以上の四点を根拠として、皮影の雷公像の成立は清時代より遡らないと結論付けた。確かに清朝時代の雷公像の形式と第一章で述べた皮影の雷公像の形式的特徴は一致している。しかし、第三章で確認したように、皮影の雷公像の図像の特徴はすでに南宋～元時代とされる人物螺鈿聯にみられることから、江氏の主張は問題があると言わざるを得ない。また、管見によれば、従来の研究で注目されていない雷公像もあるので、以下では明時代の資料からみていく。

中国国家図書館の中華古籍資源庫に収蔵されている明時代の万曆



図14 雷神像 明
『新刻出像増補搜神記』挿絵

年間（一五七三〜一六二〇）の刻本『新刻出像増補搜神記』巻一の雷神条には、⁽²⁷⁾ 雷州の雷神廟の由来などについて記されている。ここで注目されるのは、雷神の姿をあらわした挿絵

である（図14）。上半身に七つの連鼓を廻らし、頭上に冠を戴き、鋭い嘴を持ち、左手に二本の撥、右手に槌を執り、短袴を穿き、背中に翅があらわされている。こうした特徴は、先にみた皮影の雷公像と比べると、服制は異なるが、鳥の嘴、翼、連鼓など主な特徴はほぼ一致している。したがって、江玉祥氏の皮影の雷公像の成立が清時代以降とする見解は見直されるべきであろう。

この雷神像と類似している挿絵は清時代の宣統元年（一九〇九）に重刊された『絵図三教源流搜神大全』の辛興荷元帥条にもみえる。⁽²⁸⁾ ほぼ同じ姿だが、左手に楔、右手に槌を執り、短袴の上に獣皮のよなものを腰に纏い、足に尖った四本の爪があらわされている。また、次のような話が収録されている。⁽²⁹⁾ 昔、雍州の神雷山に鼓を操る雷神が夏から秋にかけて五羽の鶏に姿を変えて地中に隠れていたところ、辛興という貧しい男が偶然見つけて母親のために家に持ち

帰った。母親がその一羽を食べようとしたとき、鶏が「子は雷、食べてはならぬ。殺さなければ恩を与えよう。」と言ったが、無視して殺そうとしたため、雷に打たれて死んでしまった。家に戻った辛興は母の亡骸を抱いて自らを責め、雷に打たれて死んだことを知って天帝に訴えると、天帝は鶏に変化した雷神を殺そうとした。すると大風雨が起り、雷神は再び辛興を殺そうとするが、その孝心に同情して誤って母親を殺したことを詫びて辛興に一二火丹という仙薬を与えた。仙薬を飲んだ辛興は「妖其頭、喙其嘴、翼其両肩、左尖右槌、踏五鼓」の姿に変えて母の亡骸と共に天上世界に昇仙した。天帝は辛興の孝心に感動して「雷門荷元帥」に封じたという。ここで注目されるのは、辛興の変じた姿が、鳥の喙で両肩に翼が生え、左手に楔のような尖ったもの、右手に槌を持ち、五鼓を踏むと記されている点であり、これは皮影の雷公像の姿に近づいていると言えよう。⁽³⁰⁾

次に、元時代に遡る図像として、道藏に収録される元末明初に成



図15 祈晴符 元末明初
『道法会元』挿絵

五雷大法」に描かれた祈晴符（図15）があげられる。鳥の喙、背中には翅、手に楔や旗を持ち、鋭い爪の足をした図像が描

かれており、こうした姿は皮影の雷公像に近似する。このほか様々な雷法の符にも手に楔や旗、または斧を持った図像がみえ、同巻六〇「上清玉樞五雷真文」の歛火大神符には翅はないものの同様の二体の図像に「雷公左執、命師行風。電母右侍、火令忽忽」とある。⁽³¹⁾つまり、雷法の神々としてこうした図像が用いられたことが分かる。

また、雷法に関する『法海遺珠』巻八「九天雷晶使者梵炁隱書機法」には、鶏の嘴、両手に楔と槌を持ち、爪の足をした図像が南、北、西、中央の各雷符の中にあらわされており、これは雷公像と考えられる。⁽³²⁾

また、『道法会元』には雷公の姿形について詳細な記述がある。卷九三「雷霆三要一炁火雷使者法」には雷霆の使者である將軍達について次のように記されている。⁽³³⁾

天罡大聖主雷真君馬自奴、披紅髮、紅面三目、著月下白道服、右手仗火劍、左手執火印、跣足踏火車。(中略) 主雷歛火律令大神鄧變、朱髮、天丁冠、藍身、肉角、鳳嘴銀牙、兩翅、兩脚鷹爪、緑風帶黃裙、左手執鑽、右手執鎚、跨蒼龍、身迸烈火。(中略) 先天一炁火雷飛捷使者陽谷神君張珏、歛火相、三目兩翅、青身赤體、左手執召雷旗、右手執斧、腰帶碧玉牌、一面金字。雷公電母、風伯雨師、五方蠻雷使者、合部雷神。

さらに同書卷九八「九天碧潭雷禱雨大法」には、⁽³⁴⁾
雷霆飛火掌令大神陶勝公濟。肉角、紅髮青面、雙目、鶴喙、青身、四翅、龍爪、手足左握雷局、右仗劍、紅裙仙帶。雷霆歛火律令大神鄧變伯温。肉角、紅髮青面、三目、鷹喙、青身、兩翅、

龍爪、手足左執雷砧、右執雷槌、作揮打之勢、紅裙仙帶。雷霆猛吏判官辛志 豊乗。戴牛耳幘頭、青面、銀牙、緑抱束帶、白袴早靴、左手執雷簿、右手執火筆。雷霆飛捷使者張珏元伯。肉角、紅髮青面、雙目、鷹喙、青身、雙肉翅、龍爪、手足紅裙飛仙帶。(中略) 天雷部神雷部雷神萬萬衆、肉角鷹喙、金睛雙翅、龍爪手足、風裙仙帶。即先天雷公也。(傍線筆者)

とあり、傍線部分のように皮影の雷公像の特徴が幾つもみえ、最後の傍線部には無数の雷神の神々は皆、肉角、鷹の喙、目が輝き、兩翅、龍爪の手足、風裙仙帯を纏うと記されている。これらは皮影の雷公像の特徴と一致し、とりわけ「三目」は従来指摘されている清時代の『集說詮真』、また江氏が三目の源流と見なした明時代の『封神演義』に登場する三目の聞太師⁽³⁵⁾より古いことが注目される。

ところで、李躍忠氏によると、現代の広東省陸豊地区の皮影戲では上演前に行う「洗叉」という儀式で、五雷符をスクリーンの四隅に貼り付け、魔除けや神々の加護を願うという。また皮影戲の演目には道教の神々が多数登場する『天官賜福』『八仙慶寿』などが各地で伝統的に上演されており、元始天尊や趙靈官などの皮影の作例が現存している。こうした皮影と道教との関係を踏まえると、道教經典に記された雷公の姿形が皮影の雷公像に反映していることは十分に考えられる。つまり、皮影の雷公像の図像的源流は少なくとも元末明初に遡ることができよう。

さらに、北宋時代に遡る可能性がある作例を指摘しておきたい。

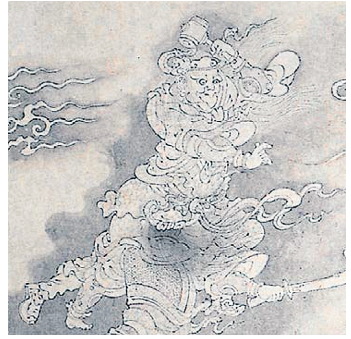


図16 洗兵図 呉偉 明
広東省博物館

広東省博物館所蔵の明時代の画院画家呉偉（一四五九～一五〇八）が描いた洗兵図には、手に楔と槌を執る尖った鳥の喙を持つ人の姿が描かれている（図16）。

この呉偉の洗兵図は、清の宮廷所蔵の書画著録『石渠

宝笈』卷三十四³⁶に「明呉偉倣李公麟洗兵図一卷」と記されており、北京故宮博物院が所蔵する呉偉の洗兵図は、北宋時代の文人画家李公麟の洗兵図を臨模したものであることが分かる。北京故宮博物院の朱万章氏は、故宮博物院所蔵の洗兵図と広東省博物館所蔵の洗兵図は、尺寸、構図、様式、材質、印鑑などの一致から本来同一の作品であることを指摘し、故宮博物院の作品はその巻首部分であることを明らかにした。³⁷したがって、広東省博物館所蔵の呉偉の洗兵図は北宋時代の李公麟の臨模であることが分かる。

洗兵図に描かれた内容をみると、まず洗兵とは前漢時代の劉向撰『説苑』に収録された故事で、周武王の出陣前に雨が降り、武王は天が兵器を清めたと考えた。そして殷紂王を討つことができたので、以来、戦いの前に雨が降る洗兵は勝利を意味するとされた。それ故、本図に描かれた雲中の群像は雨を降らす雷公、風伯、雨師たちと考えて良い。手に楔と槌を執る尖った鳥の喙の人物は雷公像と考えら



図17 鳥首人身俑 北宋
四川省蒲江県五星鎮出土

豚の顔の雷公像、力士形の雷公像が併存していたことが分かる。

加えて、四川省蒲江県五星鎮出土の鳥首人身俑（図17）に注目したい。本墓からは熙寧五年（一〇七二）銘の買地券、八六体の陶俑、銅銭などが出土した。³⁸この俑は当時のものと認められ、総高三六・七センチ、像高二八・五センチで、表面に釉薬が施されている。頭部は尖った喙の鳥で、丸襟筒袖の長衣を着け、両翼を広げ、背中に葉状のものを立てている。本墓からは像高三一・五センチの翼がない鳥首人身俑が出土しており、報告書は二体の俑を「雷、電」を象つたものとしている。また、雷神俑について考察した白彬氏もこれを雷公像と認めている。³⁹本墓からは「日」と刻まれた雲に乗る円形の日象を持つ俑、「月」と刻まれた雲に乗る円形の月象を持つ俑が出土し、さらに雲に乗った持物を欠した女俑が鏡を持った電母と考えられることも合わせて、この鳥首人身俑が雷公像であることは認められて良いだろう。こうした鳥の喙を持つ雷公像は皮影の雷公像と近似しており、したがって、皮影の雷公像の源流は北宋時代に遡る可能性があると言えよう。なお、白彬氏が指摘するように四川省

綿陽博物館が所蔵している宋代の雷神俑は五連鼓がめぐる力士形で、また綿陽市南宋墓から出土した雷神俑は豚のような頭部で鼓に跨った姿をしており、当時さまざまな雷公像が存在していたことが分かる。

尖った喙で、翅を持った雷公像の発生については、図像的類似性と雷神の性格から仏教の護法神迦楼羅の影響を指摘する見解がある。京極健史氏は、迦楼羅の図像によくみる蛇を銜えたり踏みつけたりする姿が、『酉陽雜俎』『録異記』に記された蛇を掴んで食べようとしたり踏みつけたりする姿と共通している点、さらに唐時代の密教經典である菩提流志訳『金剛光焰止風雨陀羅尼經』には、迦楼羅が有害な龍を退治し、暴風雨、霹靂などの災害を止めることができる、すなわち、雷を制御できることが雷神の性格を有することを指摘し、鳥頭人身有翼の雷神像の発生に迦楼羅の影響を認めている⁽⁴⁰⁾。

なお、鳥頭有翼の神像については、杉原たく哉氏も指摘する如く、古くは湖北省荊州市天星觀二号墓出土の戦国時代の木彫羽人像、陝西省綏徳県四十里鋪墓門画像石には西王母の隣にあらわされた後漢時代の作例が知られ、また『山海經』海外南経には羽民国や謹頭国に半鳥半人の異国の民が記されており、杉原氏はこうした鬼神や怪人たちが後世の雷神像にも影響を与えたと推測している⁽⁴¹⁾。

このうち謹頭国の半鳥半人については、その姿をあらわしたとされる前漢時代～西晋時代の帯鈎が各地で出土している⁽⁴²⁾。重慶市雲陽旧県坪遺址出土の前漢時代の作例に注目すると(図18)、金銀象嵌

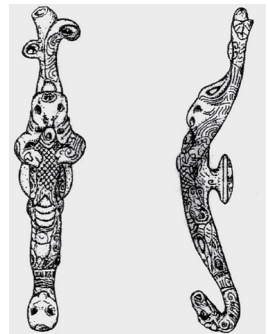


図18 帯鈎 前漢
重慶市雲陽旧県出土



図19 雷公像 清～現代 甘肅
成都・中国皮影博物館

が施された銅製の帯鈎の正面には二本の爪の両手で魚を掴み食べようとする翼が生えた異形があらわされ、側面から見ると尖った喙を持つ鳥の頭をしている。唐治澤氏はこれを謹頭国の民の姿とみなし、さらにその頭部の原形を梟とみなし、梟には辟邪と辟兵の意味があり、また、魚は周武王の白魚の故事に基づく吉祥のモチーフと解釈している⁽⁴³⁾。

しかし、管見によると『山海經』中山経には「飛魚、其状如豚而赤文、服之不畏雷、可以禦兵」⁽⁴⁴⁾とあり、飛魚を食せば雷を畏れず、敵の攻撃を防ぎ守ることができると記されている。これを踏まえれば帯鈎の異形像は雷に関わる神格とみることも可能であろう。この飛魚は唐時代の『芸文類聚』卷二天部下の雷の条、⁽⁴⁵⁾『初学記』卷一天部上の雷の条にも収録されている⁽⁴⁶⁾。大変興味深いのは、皮影の現存作例にも腰の部分に魚があらわされている雷公像がある(図19)。つまり、鳥の喙を持つ翼が生えた雷公像は、迦楼羅の影響のみならず、こうした中国古来の造形

や伝承に基づいて成立したことも十分に考えられるのである。

結

皮影の雷公像の図像的特徴は、頭部は失った喙、第三の目、毛状の角があり、小冠を頂き、手に楔と槌を持ち、足は鋭い爪、首に領巾、腰に獣皮をつけ、背中に翅が生えたものであった。最後に、考察結果を振り返りつつ、雷公像の変遷を確認しながら皮影の雷公像の成立について整理しておきたい。

神格としての「雷神」は早くは秦漢時代には成立した『山海経』にみえ、「雷公」の初出は前漢時代の『楚辞』である。初期期の作例では前漢時代の馬王堆三号墓出土の帛画に描かれた雷公像の残欠が確認されている。後漢時代には『論衡』に力士の姿で連鼓や楔を持つ雷公像の祖形が記され、そうした姿や雷車に乗る雷公像、また十連鼓が周囲に廻る、翅が生えた熊のような動物形の雷公像が画像石に現れる。このことは東晋時代の『搜神記』に猴の頭部で家畜の体という動物的な雷公像が続けて現れる点で大変興味深い。さらに同書に記された「毛角」は唐々五代の『伝奇』『録異記』にもみえる。皮影の雷公像の特徴の一つに毛状の角があったが、それはこの毛角とみて良いだろう。

敦煌莫高窟や婁叡墓壁画に描かれた南北時代の雷公像は、十前後の連鼓を周囲に廻らす鬼神形または豚状の頭部で、二本の爪であった。

た。こうした特徴が唐時代の『酉陽雜俎』に「猪首、手足各二指」と記されるに至ったと考えられる。豚状の頭部の雷公像は南宋時代まで作例がある一方で、唐時代には豹文のような短褲を穿いた力士形の雷公像が現れ、これは五代の『録異記』の「半服絳裊、豹皮纏腰」に続く。皮影の雷公像が腰に纏った獣皮はこの記述から豹皮と考えて良いだろう。

北宋時代になると鳥の喙を持つ雷公像が四川省出土の鳥首人身俑や洗兵図にみられる。南宋元時代の漆器には三目の雷公像が現れ、こうした特徴は皮影の雷公像と一致している。また元末明初の『道法会元』には、皮影の雷公像の特徴と一致する多くの記述が認められ、雷符にも確かめられた。さらに明時代の刻本『新刻出像增補搜神記』の雷神の挿絵は、皮影の雷公像とほぼ一致していることを指摘した。従来、皮影の雷公像の成立は清時代以後とされてきた。しかし、以上の考察により、皮影の雷公像は北宋に遡及する形式を踏襲したものであり、その成立は北宋元南宋時代に求められるのである。

ところで、北宋時代には様々な形式の雷公像が行われており、また、尖った喙で翅が生えた雷公像が後に主流になることを考慮すると、北宋時代はその過渡期に当たることが考えられる。松本浩一氏や劉枝萬氏によると宋代は道教史上の重要な転換期の一つであり、徽宗の信任を得た林靈素が五雷法を能くしたことにより、民間で行われていた呪法の五雷法が歴史の舞台に登場した時期である。⁽⁴⁷⁾ その

五雷法が『道法会元』に収録され、雷神像について詳述され、その姿が現在の皮影の雷公像とほぼ一致している。北宋時代は皮影が本格的に流行した時期であることを踏まえれば、皮影の雷公像は北宋時代から現存作例に近い姿でつくられていた可能性が考えられる。この問題については、雷公像のみならず、皮影におけるそのほかの一つ一つの主題や図像の事例研究を重ねていく必要がある。そのことで、未だ全く明らかではない北宋時代の皮影戯について、ある程度再現が可能になることが期待できよう。

注

- (1) 天上の神々から福を賜う皮影劇。魏力群『中国皮影全集』一一「剧本」六（文物出版社、二〇一五年）一一九～一二〇頁。
- (2) 地獄を題材とした皮影劇。前掲注(1)『中国皮影全集』八「剧本」三、二四四～二四五頁。
- (3) 江玉祥「中国皮影戲影偶中的雷公形像」〔《文史雜誌》二〇一五年三期〕五九～六五頁。
- (4) 管見の限りほかの地域では発見できなかったが、その理由はまだ不明で、今後の課題である。
- (5) 王光普・張莉撰『北幽神怪皮影』（甘肅人民美術出版社、二〇〇二年）第七九頁。
- (6) 雷公像の先行研究については、脇坂淳「風神・雷神の図像的系譜と宗達筆「風神雷神図」」〔大阪市立美術館紀要〕四、一九八四年）五～二四頁、李均洋「雷神と雷斧」〔《雷神・龍神思想と信仰》、明石書店、二〇〇一年）八一～一二七頁、高西成介「雷神の変遷」〔《中国中世部文学研究四十年周年記念論文集》、二〇〇一年）一四二～一五八頁、馬昌儀「雷神 四蛇」〔《全

- 像山海経図比較》、学苑出版社、二〇〇三年）一二二九～一二三四頁、京極健史「中国における雷神像の変容」〔《饗發》第三号、二〇〇五年）一一頁～一三七頁、杉原たく哉「天狗はどこから来たか」（大修館書店、二〇〇七年）などを参照。
- (7) 袁珂校注『山海経校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）三二九頁。
- (8) 高誘注『淮南子注』（上海書店出版社、一九八六年）三頁。
- (9) 吳広平注『楚辭』（岳麓書社、二〇〇一年）二二二頁。
- (10) 北京大学歴史系《論衡》注釈小組「論衡注釈」（中華書局、一九七九年）三九四頁。
- (11) 干宝撰『搜神記』（中華書局、一九七九年）一五一頁。
- (12) 段成式撰『酉陽雜俎』（中華書局、一九八二年）八二頁。
- (13) 『太平広記』卷三九四雷二陳鸞鳳条。
- (14) 『太平広記』卷三九三雷一徐調条。
- (15) 《古本小説集成》編委会編『古本小説集成 北方真武祖師玄天上帝出身志伝』（上海古籍出版社、一九九四年）一七七～一七八頁。
- (16) 徐応秋撰『玉芝堂談薈』卷二十〔《四庫全書》子部雜家類〕九七三頁。
- (17) 江玉祥前掲注(3)論文。
- (18) 黄伯禄編、蔣超凡注『集説詮真』卷四（上海慈母堂藏版、清光緒乙卯年）三五八～三五九頁。
- (19) 黄盛璋「論「兵避太歳」戈与「太一避兵図」争論症結、引出問題是非檢験与其正解」〔《陝西省歴史博物館館刊》一〇冊、二〇〇三年〕。
- (20) 喻燕嬌「馬王堆漢墓帛画《神祇図》研究二則」〔《湖南省博物館館刊》二〇一三年〕。
- (21) 周世栄「馬王堆漢墓的《神祇図》帛画」〔《考古》一九九九年十期〕九二七頁。
- (22) 敦煌文物研究所編『中国石窟 敦煌莫高窟 一』（文物出版社、一九八一年）一〇四頁参照。
- (23) 山西省考古研究所・太原市文物管理委员会「太原市北齊婁叡墓發掘簡報」

- (1) 「文物」一九八三年一〇期) 図版三一二参照。
- (24) 盧丁・肥田路美編『中国四川唐代磨崖造像』(重慶出版社、二〇〇六年) 一五三頁。
- (25) 前掲注(6)杉原書。
- (26) 前掲注(3)江玉祥論文六五頁。
- (27) 『新刻出像増補搜神記』卷一(明万曆唐氏富春堂刻本、中国国家図書館中華古籍資源庫蔵)三三三頁。
- (28) 『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社、二〇一二年) 二二九頁。本書は元明時代の民間信仰の神々について述べた類書で、冒頭の葉德輝の「重刊絵図三教源流搜神大全序」によると、本書は元版『画像搜神広記』をもとにしつつ、明時代の洪武年間(一三六八―一三九八)以降の封号や神廟の対聯の内容を書き加えたものであるという。
- (29) 前掲注(28)、一三〇―一三二頁。
- (30) なお、本書三三四頁の五雷神条は先にみた万暦年間本の雷神条と同じ内容だが、同三三三頁の挿絵にあらわされた雷神像は文官の姿をしている。江玉祥氏はこれを明時代の図像とし(前掲注(3)江玉祥論文六三頁)、皮影の雷公像の成立を清時代以降とした点に問題があった。
- (31) 張繼禹編『中華道蔵』第三六冊(華夏出版社、二〇〇四年)三六五頁。
- (32) 前掲注(31)『中華道蔵』第四一冊四一九頁。
- (33) 前掲注(31)『中華道蔵』第三六冊五八九―五九〇頁。
- (34) 前掲注(31)『中華道蔵』第三七冊二二頁。
- (35) 前掲注(3)江玉祥論文。
- (36) 張照等撰『石渠宝笈』第三九冊卷三四(上海涵芬樓、一九一八年)二二頁。
- (37) 朱万章「明吳偉《洗兵図》鑑蔵考」(『栄宝齋』二〇一二年一〇期)二〇二頁。
- (38) 陳顯双・廖啓清「四川蒲江泉五星鎮宋墓清理記」(『考古与文物』一九八六年三期)四二―四五頁。

- (39) 張勳燎・白彬『中国道教考古』第六冊(線装書局、二〇〇六年)一七三―一七三頁。白冰「雷神備考」(『四川文物』二〇〇六年第六期)七一頁。
- (40) 前掲注(6)京極論文二二六―二二九頁。馬昌儀もこうした仏教の影響について言及している(前掲注(3)書二二三二頁)。
- (41) 前掲注(6)杉原書、一一七頁。
- (42) 唐治澤「重慶三峡庫区新出土神人手抱魚帶鈎考」(『中原文物』二〇〇八年第一期)五八―六二頁。武璋「漢晋時期神人手抱魚圖像釈」(『東南文化』二〇一一年六期)七五―八一頁。
- (43) 前掲注(42)唐治澤論文、六一頁。
- (44) 前掲注(7)袁珂校注『山海経校注』一二七頁。
- (45) 汪紹楹校、歐陽詢撰『芸文類聚』(上海古籍出版社、一九六五年)三五頁。
- (46) 徐堅撰『初学記』一卷(中華書局、一九八〇年)二二頁。
- (47) 松本浩一「宋代の雷法」(『社会文化史学』一七号、一九七九年)四六―六四頁、劉枝萬「雷神信仰と雷法の展開」(『東方宗教』六七号、一九八六年)一―二二頁。

〔図版出典〕

- 図1・2・19 成都・中国皮影博物館。
- 図3 魏力群編『中国皮影戲全集』一九(文物出版社、二〇一五年)一〇九頁。
- 図4 魏力群編『中国皮影戲全集』一九(文物出版社、二〇一五年)一一三頁。
- 図5 魏力群編『中国皮影戲全集』一四(文物出版社、二〇一五年)六一頁。
- 図6 王光普「北幽神怪皮影」(甘肃人民美術出版社、二〇〇二年)九二頁。
- 図7 成都金沙遺跡博物館・湖南省博物館編『馬王堆漢墓文物珍品展』(四川人民出版社、二〇一三年)一三九頁。
- 図8・12 金子典正氏撮影。
- 図9 中国画像石全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国画像石全集 江苏、安徽、浙江漢画像石』四(山東美術出版社、河南美術出版社、二〇〇

〇年）三七頁。

図10 朱錫祿編『武氏祠画像石』（山東美術出版社、一九八六年）。

図11 ロデリック・ウィットフィールド編『西域美術第一巻 敦煌絵画Ⅰ』（講談社、一九八二年）図三九一。

図13 渋谷区立松涛美術館編『開館一〇周年記念特別展 中国の漆工芸』（便利堂、一九九一年）図九八。

図14 『新刻出像増補搜神記』巻一（明万曆唐氏富春堂刻本、中国国家図書館中華古籍資源庫蔵）三三頁。

図15 『中華道蔵』第三六冊（華夏出版社、二〇〇四年）三七一頁。

図16 朱万章「明吳偉《洗兵図》鑑蔵考」（『采宝齋』二〇一二年一〇期）二〇八頁。

図17 張勳燎・白彬『中国道教考古』第六冊（線装書局、二〇〇六年）一七三五頁。

図18 唐治澤「重慶三峡庫区新出土神人手抱魚帶鈎考」（『中原文物』二〇〇八年第一期）五九頁。

〔附記〕

本稿は、成都博物館及び成都・中国皮影博物館の研究成果の一部である。本論の作成にあたり、成都博物館の王毅館長、李明斌副館長、江章華副館長から貴重な援助を賜りました。記してここに深く感謝申し上げます。